

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展に
いかに貢献できるか

■ 2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:24 | 血 RY202 良心館 2階 R Y 2 0 2 番教室

学校保健体育研究部会【課題C】口頭発表②

座長：春日 晃章（岐阜大学）

11:25 ~ 11:39

[学校保健体育-C-05] 幼児の遠投能力と家庭環境との複合的関連（教,測,発）

*大坪 健太¹、春日 晃章²、清水 紀宏³、中野 貴博⁴ (1. 岐阜協立大学、2. 岐阜大学、3. 筑波大学、4. 中京大学)

11:40 ~ 11:54

[学校保健体育-C-06] 幼児期から中学生期における運動能力特性のトラッキング度合いの検証
（発）

男子における年長時、小学6年時及び中学3年時の縦断的運動能力データから

*小椋 優作¹、春日 晃章² (1. 中部学院大学短期大学部、2. 岐阜大学)

11:55 ~ 12:09

[学校保健体育-C-07] 幼児期の自由遊びにおける身体組成と身体活動量の関係（測,発）

*浅川 正堂¹、春日 晃章² (1. 修文大学短期大学部、2. 岐阜大学)

12:10 ~ 12:24

[学校保健体育-C-08] 幼児期における動感発生の契機に関する発生運動学的研究（教,方,スポーツ
運動学）

*濱崎 裕介¹ (1. 白鷗大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：春日 晃章（岐阜大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ～ 12:24 RY202 (良心館2階 R Y 2 0 2 番教室)

11:25 ～ 11:39

[学校保健体育-C-05]幼児の遠投能力と家庭環境との複合的関連（教,測,発）

*大坪 健太¹、春日 晃章²、清水 紀宏³、中野 貴博⁴ (1. 岐阜協立大学、2. 岐阜大学、3. 筑波大学、4. 中京大学)

本研究は、年長児を対象に遠投能力と家庭環境との複合的関連について明らかにすることを目的とした。対象は、2市17園の年長児312名（男児177名、女児135名）およびその保護者であった。そのうち、データ欠損のない303名を分析対象とした。遠投能力を測定するためにソフトボール投げテスト（1号球）を実施した。テストにより得られた測定値は男女別に Tスコア化して分析に用いた。家庭環境は、関連する先行研究を参考に質問紙を作成し、調査を実施した。調査票は、子どものスポーツ活動に対する価値観7項目（回答形式：5件法）、近隣の運動施設1項目（4件法）、スポーツ嗜好性2項目（4件法）、子育て意識5項目（5件法）および家庭におけるボール所持の有無1項目（2件法）の計16項目から構成された。遠投能力と保護者の運動・スポーツに関する価値観や家庭環境との関連について検討するため、Tスコア化したソフトボール投げテストの記録を従属変数、家庭環境に関する16項目を独立変数とする重回帰分析を実施した。分析の結果、「子どもとスポーツのことを話す（ $\beta=0.21$ ）」、「将来、スポーツで活躍してほしい（標準偏回帰係数 $\beta=0.17$ ）」および「子どもとスポーツ観戦に出かける（ $\beta=0.14$ ）」の3項目において有意な標準偏回帰係数が認められた（調整済み $R^2=0.13$ ）。いずれも正の標準偏回帰係数を示しており、頻度あるいは期待の高さと遠投能力の高さが関連することが示唆された。また、「家庭におけるボール所持の有無」において有意な関連は認められなかったが、本研究対象の家庭においてボールを所持している割合はおよそ9割と高く、用具は充実している傾向が認められた。したがって、親子でのスポーツに関する会話やスポーツ観戦といった親子の関わりを充実させることが、子どもの遠投能力の向上に対して有用である可能性が示された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：春日 晃章（岐阜大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ～ 12:24 RY202 (良心館2階 R Y 2 0 2 番教室)

11:40 ～ 11:54

[学校保健体育-C-06]幼児期から中学生期における運動能力特性のトラッキング度合いの検証（発）

男子における年長時、小学6年時及び中学3年時の縦断的運動能力データから

*小椋 優作¹、春日 晃章² (1. 中部学院大学短期大学部、2. 岐阜大学)

本研究は、幼児期から中学生期における男子の縦断的運動能力データを用いて、各運動能力におけるトラッキングの程度を検討することを目的とした。分析対象は、年長時、小学6年時、中学3年時に運動能力測定（年長時：握力、体支持持続時間、長座体前屈、反復横跳び、25m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ／小学6年時・中学3年時：握力、上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、50m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ）を実施した男子24名であった。分析方法として、まず各運動能力における全国の平均値及び標準偏差値を用いて、年長時は0.5歳区分でTスコア化し、小学6年時及び中学3年時は各学年内でTスコア化した。そして、それぞれの運動能力値を3群（上位群：55.0以上、中位群：45.0以上55.0未満、下位群：45.0未満）に分類し、クロス集計およびカイ二乗検定と残差分析を適用した。分析の結果、中学3年時と年長時においては、立ち幅跳び及びソフトボール投げに有意性が、中学3年時と小学6年時においては、握力、50m走、ソフトボール投げに有意性が認められた。さらに、中学3年時に上位群であった者は年長時及び小学6年時においても上位群に属する割合が多く、中学3年時に下位群であった者は年長時及び小学6年時においても下位群に属する割合が多い傾向にあった。このことから、全ての運動能力ではないが、年長時や小学6年時の運動能力レベルは中学3年時までトラッキングする可能性があることが示唆された。また、握力を除くと、走・跳・投に有意性が認められたことから、基礎運動能力は他の運動能力よりもトラッキング度合いが高いことが窺えた。特に「投能力」は、年長時と小学6年時ともに中学3年時と関連があったことから、幼児期の投能力特性が中学生期まで大きく影響することが推察された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：春日 晃章（岐阜大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ～ 12:24 RY202 (良心館2階 R Y 2 0 2 番教室)

11:55 ～ 12:09

[学校保健体育-C-07]幼児期の自由遊びにおける身体組成と身体活動量の関係（測,発）

*浅川 正堂¹、春日 晃章² (1. 修文大学短期大学部、2. 岐阜大学)

本研究は、幼児期における身体組成と自由遊びの身体活動量との関係性について検討することを目的とした。対象は満5歳以上の幼児117名であり、調査項目は身長、体重、体脂肪量、除脂肪量および身体活動量（METs）であり、身体組成はInBody270（インボディジャパン社製）を使用し10月下旬に測定した。身体活動量はActive style Pro（オムロン社製）を使用し11月～12月の晴天時の平常保育3日間を測定した。分析にあたってBMI、体脂肪率（% FM）および除脂肪量指数（FFMI）を算出した。加えて、保育時間内の自由な外遊び時間における中高強度活動量率（% MVPA）および高強度活動量率（ ≥ 6 METs）を算出した。% MVPAに有意な性差が認められたため男女別にTスコア化し、% MVPA上位群（25%）、中位群（50%）および低位群（25%）の三群に区分した。% MVPA三群における% FMおよびFFMIの差について検討するため、二要因分散分析（% MVPA $\times$ 性）を適用した。また ≥ 6 METsによる三群についても有意な性差が認められたため、% MVPAと同様の分析を行った。分析の結果、いずれの項目においても有意な交互作用は認められなかった。性に有意な主効果が認められた項目は、% FMおよびFFMIであり、多重比較検定の結果、FFMIにおいて男児が女児よりも高い値を示した。また% FMおよびFFMIにおいて% MVPAおよび ≥ 6 METsには有意な主効果は認められなかった。本研究の結果からは、自由な外遊びの時間における身体活動量の多寡と幼児期の身体組成の関係性は認められなかった。しかし、本研究において身体活動量の性差および身体組成の性差が示されていることや先行研究において幼児期の身体活動量の差は、保育時間内よりも降園後や休日に見られることが報告されており、今後、さらなる検討が必要だと考えられた。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題 C】口頭発表②

座長：春日 晃章（岐阜大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ～ 12:24 RY202 (良心館2階 R Y 2 0 2 番教室)

12:10 ～ 12:24

[学校保健体育-C-08]幼児期における動感発生の契機に関する発生運動学的研究（教,方,スポーツ運動学）

*濱崎 裕介¹ (1. 白鷗大学)

動きや技の系統性については学習指導要領解説において丁寧に説明されており、ある動きや技が他の動きや技とどのようにつながり、どのように発展していくのかが明示されている。新しい動きの発生には、似た動きの経験という感覚的な素材が必要である。学習指導要領解説では、その素材となる「動きかた」が具体的な例として示されている。しかし、新しい動きを覚えようとする動機づけには、似た動きの経験だけでなく、器具や用具の素材や硬さ柔らかさについての身体的な経験も重要な役割を果たす。つまり、身体経験を通じた感覚の記憶は、過去に経験した「動きかた自体」だけでなく、「用具の素材や硬さ柔らかさ」の経験をも含めて新しい動きの発生（動感発生）に関わるものである。

幼児期には自発的な活動としての遊びを通して次々と新しい動きかたを身につけていく。われわれ大人の場合は、過去の似た動きの感じを能動的に思い出しながら（再想起）、身体各部の動かし方を知的理解によってある程度詳細に組み立ててから練習することが多い。それに対して幼児の場合には、再想起ではなく、これまでの身体経験に基づいて過去把持されたぼんやりとした感覚（空虚形態）やイメージ（空虚表象）から遊びの中で受動的に動きを発生させていくといわれる。

本研究では器械運動と関連の深い動きに焦点を当て、いくつかの例証を挙げながら幼児期に特徴的な動感発生の契機についてその深層地平に考察を加える。